住み方調査と " 建築計画学 "

OTSUKI Toshio
大月 敏雄
東京大学

1．今和次郎の「住宅と生活」研究

普通の暮らしをどう捉えるかという課題は、建築学においても非常に重要なテーマとなっているが、このことに、柳田国男から始まる民俗学の系譜の流れを汲む人々が重要な役割を果たしてきた。

その中でも今和次郎の果たした役割は大きい。東京美術学校（現：東京藝術大学）の図案科を 1912 年に卒業した今は、早稲田の建築学科に採用され、1917 年から民家保存研究会であった「白茅会」に加わり、柳田国男とともに民家調査に参加し、各種のスケッチを残している。その成果は 1922 年に『日本の民家―田園生活者の住家』という本に結実し、「民家」という言葉を広める役割も果たした。

ここで興味深いのは、今の方法論である。明治以降に始まった日本の建築学の主眼は、新たな建築物を設計する際に、それ以前に実際に建った類似事例を集めて、規模や間取りを研究するというものであった。実学としての建築学には、設計の即戦力となる知識が要請されていたのである。だから、近代に入って新たに要求される官公庁や公共施設などの近代的建築物の設計にあたっては、欧米の実例を参照することが何より重要であった。

しかし、建築学科ではなく図案科を卒業した今のアプローチは少し違っていた。民家を巡って生じている現象を、スケッチという、独特の空間構成表現手段を用いて理解し、解釈するという方法論を採ったのである。目的がそもそも、「すぐに建築設計の実務に役立つ知識や技の獲得」にあるのではなく、「目の前で展開する建築を通じた生活現象がどのように成り立っているのかを理解し、その解釈を示す」という点にあったことが、それまでの建築学のアプローチと大きく異なっていた。

また、もう一つ大きく異なっていたのは「住宅と生活」に焦点を当てたことである。明治以降の建築学にとって「住宅」は、言ってみれば「建築」に入っていなかった。「住宅」は大工や棟梁が携わるものであって、建築家と称される学士あがりのエリート・テクノクラートが手を染めるような代物ではないという考えが、当時は支配的であった。ましてや、普通の住宅がどのように住まわれているのかなどという「生活」現象に目を向ける建築家は極めて少数派であった。確かに、明治時代には多数の住宅建築に関する書物が出版されてはいたが、それらは単に、大工のノウハウを伝授するものや、明治に入って改良された便所や暖房機器や台所回り用品をいかに住宅に組み込むべきかを解説したものであった。住宅と、そこで繰り広げられる普通の生活の実態を理解した上で、あるべき住宅の設計を新たに考えだそうという動きは、建築学からはほとんど出てきていなかった。

ヨーロッパではこの時期、近代建築運動の一環として、国家を形成する重要な要素としての

住宅の改善･改良に注目が集まり始めており、まずは足元の住宅から変えて行かねばならない、というような雰囲気が出始めていた頃であったが、日本において多くの建築関係者が住宅の分野に実際に関心を示し始めたのは、関東大震災前後のことであった。日本で「住宅」が注目されるようになるのは、内務省地方局有志が 1908 年に『田園都市』を出版してからであって、今が白茅会に参加し始めた大正半ば頃には､東京においてようやく「住宅問題」が「都市問題」の文脈の中で語られるようになり、イギリスのハワードの田園都市的な居住環境を良しとする趨勢にあった。だから､『日本の民家』のサブタイトルは｢田園生活者の住家｣であったのだろう。しかし、当時一般に語られていた住宅の問題は、第一次世界大戦中の好景気によって都市に集中する人々の住宅をいかに供給するか、そしてそのための都市計画はどうあるべきかという問題における「住宅」なのであって、その住宅の中で展開されるべき「生活」については、生活を欧米化（洋風化）すること以外のことはほとんど語られなかった。こうした中での、今による「住宅と生活」への着目は､明らかに当時の建築学においては､一歩先んじていたものであった。

さらに、今は大正 12（1923）年の関東大震災の焼け跡において自力建設で仮の住まいを建てるバラック住まいの人々の暮らしに着目し、その姿をスケッチに納めていた。そしてすぐさま「バラック装飾社」なる設計事務所を開設し、それまでの、観察し、スケッチし、理解し、解釈していた立場から一歩踏み込み、復興する東京の町の様相を構成する商店や住宅の実際の設計にも携わるようになった。いわば、研究から実践への転換を果たしたと言い得るだろう。とりわけ、東京帝大柳島セツルメントの建物の設計は、今の研究方法論と実践論が、東京帝大関連施設において実現したという意味で、極めて大きな意義をもっていたと思われる。

その後今は、1925 年には「銀座街風俗」を実施し、1927 年には「しらべもの（考現学）展覧会」を催し、1930 年には『モデルノロヂオ（考現学)』を吉田謙吉と共に出版し、震災復興後の東京における新しい「普通」の追究を行い、スケッチばかりではなく趣向を凝らしたデータ収集の営み自体が新たな社会観察の手立てとなり得ることを一般に示した。

しかしながら、考現学に代表されるような、社会を観察する枠組みの提示や解釈を行い続けることは時代が許さなかった。今は 1922 年に朝鮮総督府の委嘱によって朝鮮半島で民俗調査に従事し、その成果として 1924 年に『朝鮮部落調査特別報告 第一冊民家』を刊行したが、このことは､「普通を追究する」ことが別の観点からは、国家の「役に立つ」ことにもつながりうることを図らずも示していた。

今は 1934 年から 1941 年にかけて、農林省積雪地方農村経済調査所による積雪地方農家家屋調査や同潤会による東北地方農山漁村住宅改善調査において、重要な役割を演じているが、国家と結びついたこれら一連の民家研究の仕事は、単に普通の暮らしの成り立ちをどう捉えるかという解釈論だけではなく､「普通の住宅」を「実学」として「改善」や「善導」の対象として位置づけているところに特徴があり、大正時代の生活改善運動の延長が、軍国主義の浸透によって、あらゆる知的活動を「改善」や「善導」に収斂させて行く時代の趨勢に、今もまた巻き込まれていたということであろう。

２．西山夘三の「住み方調査」

今から 20 年ほど前、私がまだ大学院の博士課程の学生であった頃、東大生産技術研究所の藤森照信教授といっしょに、ベトナムのハノイの民家調査に参加する機会を得た。その時、藤森氏から、次のようなエピソードを聞いた。建築学における建築計画学の祖の一人とされる京大名誉教授西山夘三は、はやくから今和次郎に大変憧れを抱きつつ、今さんみたいになりたくて、各種調査を行い、各種のスケッチを残していたということであった。言われてみれば、西山夘三著の書籍にはたくさんの手書きのスケッチがちりばめられているが、これらの背景に、今和次郎へのあこがれがあったというのは、大変に納得できる話である。

西山夘三は、昭和 16 年に国が設置した住宅営団の研究部に所属し、毎年更新される住宅営団が建設するべき標準平面図のための基礎研究を行っていた。この標準平面図の策定が、戦後の公営住宅標準設計や公団の nLDK につながって行ったのであるが、その前後に西山が行った大量の「住み方調査」を通して、どんなに狭小な住宅でも、庶民は食べる空間と寝る空間を分ける傾向にあり、この「食寝分離」を標準平面図作成のための原則にすべきことを唱えていたのである。当時この「食寝分離」論は住宅営団ではわずかな例外を除いて、実際に採用されることはなかったが、戦後の公営住宅や公的住宅（国鉄社宅、公務員住宅、電電公社社宅など）の平面計画に大きな影響を及ぼした。建築計画学というのは、現実社会の中で普通に行われている人間の暮らしのパターンや癖のようなものを理解し、その中にある種の法則や因果関係を発見し、それを新たな建築設計にフィードバクしようという学問である。こうした意味では、西山夘三が行った「住み方調査」は、それまでほとんどの建築関係者が注目しなかった、庶民の普通の暮らしを、大量調査によってあぶり出すという意味で、大変画期的な調査であったし、誰しもが「言われてみればそうだよね」と思うような「普通」なパターンを用いて、実学としての建築設計にフィードバックしようとする姿勢は、極めて建築計画的であったといっていいだろう。

３．吉武泰水の「使われ方調査」

このように、今和次郎の影響を強く受けた西山夘三は、住まいに特化して、新たな建築設計に資するための「暮らしの中の普通」を追究するために「住み方調査」を実施し、実学としての建築計画の筋道を開いて行った。一方で、東京では敗戦直後、東京大学の吉武泰水によって建築物の「普通の使い方」を追究することによって、新たな設計の基礎とする動きが生じていた。トイレやエレベーターで人はどのような待ち行列を作るか、学校での上下足の履き替えはどのように行われているか、といった、一見みんなが普通にこなしている動作を科学的に調べ、それらの実態調査を踏まえてなるべく数学的な理論に落とし込んで行くという研究スタイルであった。戦後の施設計画学の基礎をつくった吉武研究室ではこれらの調査を「使われ方調査」と称していた。

西山研究室の「住み方調査」と、吉武研究室の「使われた方調査」。この言葉遣いが、彼らが目の前の現象をどういうスタンスで捉えようとしていたのかを物語っている。「住み方調査」の主語は住まい手であり、人間の主体性に着目していることがわかる。西山の視線はより社会科学的であった。一方で「使われ方調査」の主語は建物であって、人間は建物に影響を与える

ファクターとして捉えられる。吉武の視線はより自然科学的であった。

西山研究室では住まいの研究はその後、都市計画やまちづくりの研究に進展し、人間を主人公とした暮らしの舞台である環境総体をいかに改善すべきか、というベクトルで研究が続けられた。一方で、吉武研究室では、住宅、病院、学校、博物館、事務所等々といった、建物種別ごとの使われ方の特性を通じた各種建築設計基準の設定に、より重きが置かれた研究スタイルが追究された。これはもちろん、戦後不足していた各種建築物を大量生産する上で欠かせない、建設補助金のための各種基準づくりが、東大の建築計画研究室に担わされていたということの裏返しでもあった。

４．「普通」の解明

このように、日本の建築学は実学としての側面を、好むと好まざるとに関わらず持ち続けざるを得ないところがあり、その中で、「普通の人々の普通の暮らし」を様々な手法であぶり出し、そのこと自体を面白がり、かつ、物事の解釈の仕方のレンジを広げてくれるという極めて知的な営みを、建築学の中で展開してくれた今和次郎の存在は、とてつもなく大きかったといえよう。そして彼は、震災後のバラック装飾社や戦中の住宅改善運動の活動の中で、たまに、実学として「普通に関わる研究」を援用しながら時代の要請に応えていたのであるといえよう。

また、彼を私淑する西山夘三が西の建築計画学の代表として社会科学的観点からの「住み方調査」を広め、一方で、国家と結びつくことによって戦後大量に不足していたとされる各種施設の計画のために、自然科学的観点からの「使われ方調査」を定着させた東の建築計画学を、吉武泰水が体系づけたという風に理解することが可能であろう。

こうして、大正時代から戦後高度成長期までの日本の建築計画学の展開における「普通」の取り扱い方、そして、「理解され解釈された普通」の加工・利用の仕方は、時代とともにまた、それを扱う研究者の置かれた立場とともに推移してきてはいるが、建築学の実学的側面から繰り出される国家的要請、社会的要請からは独立ではなかった。逆に、国家的要請、社会的要請に応えようとしてきたからこそ、「普通」を明示的に理解しなければいけないという動機が、建築学の中で生じてきたのだとも言えよう。

さて、現在の建築学では「普通」はどう取り扱われつつあるのだろうか。結論から申せば、今はあまり「普通の暮らし」には着目されていない。これはおそらく、「標準的」という意味に近い「普通」という概念が我々の身の回りから徐々に失われてきていることと無縁ではないだろう。つい 10 数年ほど前までは、我々の社会には「普通の暮らし」が普通にあり得たような気がしている。旦那の勤め先、住んでいる場所、家族構成などがわかれば、たいていどんな家族なのかが、かなりの確立で推定できたと思うのだが、家族のありようそのものが多様化している現在、勤め先と、住んでいる場所と、家族構成を聞いただけでは、なかなかその人のライフスタイルに到達出来ないような、そんな世の中になっているような気がしている。このことは、建築を計画したり設計したりする上で、かなり重要な点である。もはや普通の家族というものは想像し得ない中で、誰が住むかわからないような集合住宅の間取りを考えなくてはいけないという時代に突入しているのである。

しかしながら、面白いもので、高度経済成長期に形作られた集合住宅の標準的なパターンは、

いまだに健在である。住宅の真中に玄関扉が設置され、中廊下を通って南側のバルコニーに面したリビングルームに到達する、といった基本パターンを外しては、たいていのマンションは売れないそうである。住宅の流通の中ではまだ明らかに、「（標準的な振る舞いとしての）普通」は存在しているようだ。

しかし、日本人にとってありふれた中廊下は、韓国、中国、台湾の集合住宅計画においては、明らかに普通ではない。そこではじめて、なぜ日本人は中廊下が好きなのか？という疑問が湧くのである。同様に、日本人はなぜ南側が好きになったのか？どういうプロセスで畳の間がなくなりつつあるのか？なぜ日本人は玄関を捨てきれなかったのか？という様々な「普通」に関する疑問は残っている。また、アジア人は高層住宅を好むが、欧米人は低層を好むのはなぜか？という問いに応えるのも、なかなか骨のいる仕事であろう。

また、現在において我々は病院で死ぬのが当たりまえであるが、20年くらい前の高層集合住宅では、エレベーターの設計の際に棺桶が運び込めるように、エレベーターのかごの後ろにハッチをつくって、いざとなれば棺桶も入れるような工夫をしなければならないという時代があったのだが、そのうち、家で亡くなる人がほとんどいなくなり、あるいは、病院で亡くなっても遺体を一度家に運ぶということがなくなり、いつの間にか、エレベーターのかごのハッチ問題は問題ではなくなってきた。が、現在日本政府は病院ではなく自宅で死ぬように施策を仕組みつつある。こうしたとき、再び自宅で看取りができるシステムが整ったとき、エレベーターのハッチ問題は再燃するのだろうか？

このように、我々の日常を支配している当たり前の現象は、いつの間にか徐々に変わってくるのであって、常に、新しい対応を建築設計に要請することが多いのである。こうしたときに、当たり前を忘れて設計してしまうと、居住者の方にそのつけがいってしまう。かつて、東京の下町を再開発してできた高層住宅で、お盆の迎え火・送り火が問題になったことがあった。その町はもともと長屋と路地の町で、長屋の住民はお盆になると必ず長屋の前の路地で火を焚いてご先祖の霊を迎えていた。こうした風習は、普通の高層住宅設計者には無視される。その結果、みんなはベランダで迎え火･送り火を焚くようになって、問題になったというわけである。この場合、普通の集合住宅設計が正しいのか、住民がこれまで当たり前のようにしてきた行為が正しいのか？

おそらく、どっちも正しいのだろうから、常に「普通」の成り立ちを意識する癖をもっていないと、建築の計画はなかなか変わりゆく世の中に付いて行けなくなるのであろう。日本建築学会では、東日本大震災の復興について、どういう状況が復興と呼べるのだろうかという議論が昨年あたりに大いになされた。その中で、「日常生活の回復が復興である」という意見が新たに台頭してきた。それでは、日常性とは何によって成り立っているのだろうか。こうした疑問に応えようと、建築計画研究者は今日もまた「住み方調査」や「使われ方調査」を行っているのである。普通や当たり前を問うことは、今でも、建築学においては、大変切実な問題になっている。